

# 知恩伝に及ぼした六代勝事記の影響

——亡き後藤丹治先生を偲んで——

鈴木弘道

六代勝事記と言へば、私はすぐに恩師後藤丹治先生を想ひ出す。

それほどまでに六代勝事記は先生と密接なつながりのある作品の一つであつて、私が今日、ささやかながら国文学の研究めいたことを続けることができるのも、一つは、先生の御担当になつた、この六代勝事記の御講義を通して把握させていただいた、国文学の知識・教養が基礎となつてゐればこそである。ところが、いつのまにか私是不肖の教へ子として平安時代の文学に関心を抱くやうになり、長らく六代勝事記も顧みる機会を持たなかつたが、このたび本誌が先生の追悼号として編輯されることを知るや、ぜひともこの六代勝事記に関する記事を記して先生の御恩を謝したてまつりたいと考へ、をこがましくも筆を執ることにしたわけである。しかも、内容が先生のしばしば御発表になつた、典拠研究とか比較研究に関係のあるものであれば、なほふさはしいことではないかとあれこれ考へをめぐらしたあげく、ふと思ひ出したのが、かねて心に懸つてゐた法然

上人の伝記知恩伝と六代勝事記との関係である。これにつき、いささか私事にわたることを述べて、先生を偲ぶよすがとしたい。

私が知恩伝のことを初めて知つたのは、今から約十五年前の昭和二十二年十二月頃であつたと思ふ。当時、本学文学部の夜間部学生として、先生の六代勝事記の講義を受けてゐた私は、はからずも、大正大学講師の職にあつた実兄宝田正道から、知恩伝に六代勝事記の影響があることを聞かされ、かつ、そのくはしい調査を極力勧められたのであるが、多忙にまぎれてその後も着手する暇なく、荏苒数年を過すこととなつてしまつた。ところが、昭和二十八年八月、先生のお宅へ参上した時、談たまたま六代勝事記に及んだので、私は、知恩伝のこと、兄がその覚書風の資料を持つてゐることなどをお伝へすると、先生はぜひそれを見せてほしいとおつしやる。その頃、兄は大学を辞してジャーナリストになつてゐたが、以前から日本仏教文化史（特に和讃文学）を専攻し、若干の論文も発表してゐたので、先生もよく覚えてゐて下さつたらしい。しかし、その資料たるや実はまことに粗末なもので、先生にはほとんど何の役にも

たいたない代物であらうことを憂ひつつ、私はさつそく仲介の勞をすることにした。先生はその後、関西大学国文学会編「国文学」<sup>(註二)</sup>に、

「六代勝事記私見」と題する御論文を寄せられ、その中で、六代勝事記と後世の文学作品や記録文献との關係に言及されたついでに、

法然上人伝（浄土宗西山派智湛が大永六年に著したるもの。十巻伝といふ。浄土宗全書十七、井川定慶氏編法然上人伝全集に収む。その巻二「參籠嵯峨釈迦堂事」の条の保元の乱のこと、

「東大寺勸進事」の条の平重衡罪障のこと、巻四「後白河法王崩御事」の条がそれぞれ六代勝事記に抱つてゐる、智恩伝（弘安六年頃、望西楼了恵の作つたといふもの。井川氏編法然上人伝全集に収む。その六代勝事記との關係については、宝田正道

氏の研究「知恩伝と六代勝事記」がある。これは未発表のもの

で、昭和二十八年八月、同氏の好意によつて拝覽した）の如き

も、明かにこの書の影響を受けてゐる。

と述べられたが、むしろ「未完成の資料」としか言へない程度のものお目にかけてだけであるのに、このやうにわざわざ学界に紹介して下さつたのは、まことにかたじけないことである。兄はこの研究を昭和十五・六年頃に始めたらしいが、戦争のため出征、研究が中断され、現在も中央公論社科学雑誌編輯長としての要職にあるため、ほとんど研究生活から遠ざかつてをり、残された研究は早くから私に勧めてくれてゐたのであつた。

前おきが長くなつて恐縮であるが、以下、手もとにある兄の資料および先生の御講義を書き留めた「六代勝事記ノート」を参考に、

「摩訶衍」<sup>(註三)</sup>所載の知恩伝と、新校羣書類従本六代勝事記によつて、

両者の關係を私なりにあらためて纏めてみようと思ふ。

## 二

知恩伝は、今日、仏教専門家はともかくとして、一般国文学専攻者にはあまり知られてゐないやうであるから、とりあへず、岸信宏氏の「解説」<sup>(註四)</sup>の一部を掲げると次のごとくである。

此の智恩伝二巻は最近に東京の大法大学の高瀬承敏氏が某書肆に於て入手し、その考証を「浄土学」第一輯に発表せられたるものである。智恩伝といふ書名を伝ふるものには義山の法然上人行状画図翼讚第一（浄全第十六、一〇六頁）、玄智の真宗教

典志第三（仏全、仏書目録第一、五二七頁）があるが、いづれも著者の名を出さない。然る所本書の巻末識語によつて、本書が望西楼了恵上人の選述であることが解つたのである。（下略）

知恩伝の成立年代については、石橋誠道氏がこの書の跋文に、  
今先師上人入滅之後僅雖歷七十余廻之星霜。当世奉値上人一之輩已以希也。若無委細伝記者将来無知上人德行之者歟。仍尋聞諸家伝説所令集記也。留贈後代共期往生二矣。已上

於望西楼抄出之畢

とあることにより、「宗祖の滅後七十二年目が弘安六年で、この翌年に了恵上人が、三祖聖光上人の別伝を著はされたから、この知恩伝は恐くは弘安六年頃の作であらうと推定したのである。」と述べてをられる。なほ、高瀬氏蔵本は、巻末に、

元禄十六癸未稔仲秋之頃。依江州知恩院 尊像開帳上洛。幸  
押 閱此書以書寫了。

霜月冬至日

とあり、また、別筆で、

右知恩伝二卷者。以良照義山公所持之本一写之自校合畢。  
此本東山大谷入信院庫藏在之。

惠山叟

と記されてゐるが、この高瀬氏藏本が果して原本を忠実に伝へてゐるかはすこぶる疑はしい点もあり、原本は少くとももつと整つた完  
本であらうと想像されるのである。(註六)

本書の構成は、上巻に「序文」と「上人誕生事」「兩幡雨降事」  
「幼稚異相事」など四十一の項目を、また、下巻に「明遍僧都問答  
事」「宗源法印問答事」「於月輪殿惱瘧病事」など二十九の項目  
をたててゐるが、項目だけで記事の省略された箇所もある。

### 三

六代勝事記については、既に後藤先生の詳細な御研究があるので  
省略するが、知恩伝が六代勝事記からどのやうな影響を受けてゐる  
か、その実態を次に探究してみよう。

まづ、知恩伝上巻の「參籠嵯峨积迦堂事」の条に、

七月九日太上天皇潛出城南離宮。忽洛東旧院有御幸。ト一戰  
場於其処。結軍陣於其中。主上遣官軍一征凶徒。流矢之所  
託左府失命。同廿三日奉移新院於讚岐國。其余党或仰刑

知恩伝に及ぼした六代勝事記の影響

孝 璠

官召取之。或歸王化降來。  
とあるが、これとほとんど同じやうな記事が六代勝事記にも発見さ  
れる。すなはち、

七月九日夜、崇徳(院)鳥羽太子。後ひそかに城南の離宮をいで、  
たちまちに洛東の旧院に幸給へり。戰場を其所にしめ軍陣を其

中にむすぶ。同十一日に、主上後白河臨官兵をつかはして凶徒を征  
するにや、ひのはた勢を添へてはたをなびかしつ。流矢のた  
す所相府命をうしなへり。同廿三日「太上」天皇を讚岐國へう

つし奉り、其余党或は刑官に仰せられてめしとり、或は王地に  
歸して降來。

とあるのがそれであつて、知恩伝の文は、六代勝事記の文をそのま  
ま漢文に書き直したやうな体裁となつてゐる。

次に、知恩伝上巻の「熊谷入道発心事」の条の冒頭に、建久元年  
(二九〇)十一月、源頼朝が入洛し、右近衛大将に任ぜられたこと  
が記されてゐる。その文は、

將軍右大将家頼朝平西海白浪。靡奥州緑林。着錦袴入洛。  
歴黄亞相。任羽林將軍。拜賀儀式当代壯觀也。鎮一族奢  
慰万人愁。却不忠者。賞奉公者。敢不分親疎。全無隔遠近。  
となつてゐて、これ以下は熊谷直実の出家に関することを記すが、  
右の文は、六代勝事記に見える、

征夷大將軍二位家西海の白波をたひらげ、奥州の緑林をなびか  
して後、錦のはかまをきて入洛。黄門亜相をへて、羽林大將軍  
に任ぜり。拜賀の儀式希代の壯觀也。仏法をおこし王法「を」  
つぎ、一族の奢をしづめ万人の愁をなだめ、不忠のものをしり

ぞけ奉公のもの「を」すゝめ、あへて親疎をわかず、またく遠近をへだてず。

とはほ同文であり、大きな差と言へば、「仏法をおこし王法『を』つぎ、」の文が知恩伝に見当らない程度である。

六代勝事記の右の文が、延慶本平家物語の第六末の「右大将頼朝果報目出事」の条に見える文とほとんど同一であることを、後藤先生はその御講義で述べられたことがあるが、これは、六代勝事記と延慶本平家物語とがあたかも親子の関係であつて、後者が前者の影響を甚しく受けてゐることを、強く主張せんとされたもので、既に先生の「改訂載記物語の研究」には、詳細な御考察がある（四〇頁―四五頁）。今、御講筵に列した時の私のノートを開いてみると、昭和二十二年五月十五日の日附があつて、このあたりに延慶本平家物語のことがいろいろ書き留められ、先生のやや高い調子のお元氣なお声がノートの各頁から響いて来るやうな感に打たれる。延慶本平家物語の右の条については、先生の前掲御著書にその原文が引用されてゐるが、参考のため、吉沢義則博士校註「延慶本平家物語」によつて掲げると、その巻末の第六末卅九に、次のごとく見える。

抑征夷將軍前右大将葱て目出かりける人也、西海の白波を平け、奥州の緑林をなひかして後錦の袴をきて入浴し羽林大將軍に任し、拝賀の儀式希代の壯觀也き、仏法を興し王法を継ぎ、一族の奢れるをしつめ、万民の愁を宥め不忠の者を退け奉公の者を賞し、敢て親疎をわかす全く遠近をへたてすゆゝしかりし事共也、（一〇〇七頁）

そして、これ以下には、頼朝が伊豆国蛭が嶋へ流された当時、誰も

が頼朝の果報めでたかるべき人と思はなかつたこと、池尾御前に危ふく助命されたのが頼朝の成功を導く原因となつたこと、などの記事がある。したがつて、知恩伝の「熊谷入道発心事」の条と延慶本平家物語の「右大将頼朝果報目出事」の条とは、いづれも前半に、六代勝事記とはほ等しい文を記してゐる点、構想が類似してゐるわけである。

知恩伝は、右の条に引續いて、「御室奉請上人事」の条をきはめて簡単に記した後、「御白河法皇崩御事」に移つてゐるが、その文は次の通りである。

建久三年壬子三月十三日。法皇崩御。宝算六十三也。宿善開発君也。御賀御逆臨高野詣御登山。勝地名所極觀覽。驗仏靈社。臨幸。四明受大乘戒。三井伝秘密教。東大寺追聖武跡。開眼金銅靈像。（中略）而往生極樂者朝暮御勤。御臨終正念無亂。瑜伽振鈴響限其夜。一乘暗誦音終其晝。普天昼暗。率土露滋。草木尚愁。色也況關陵松乎。鳥雀尚憂。声也況洞庭鶴乎。大宮人桜色染袂引替。卯月松敷懸藤衣成。仁流は秋津洲之外。惠茂筑波山之影。淵变为瀬之声寂々。閉レ口。砂長為レ巖之頰詳々。満レ耳云々。絵詞無之。

風フカヌ御代ニモ□ヲソ思ヒ出ル入りニシ月ノ春ノヲモカケ

これに対して、六代勝事記は、前掲の「征夷大將軍（中略）遠近をへだてず。」の文の直後に、

建久三年壬子。後白河三月十一「三」日法皇崩。御年六高年高運君也。御賀御逆修高野

詣御登山、勝地名所散覽をきはめ、驗仏靈社臨幸を尽し、四明には大乘戒をうけ、三井には蜜教をならひ、東大寺は聖武製草の跡をとめて、金銅の靈像は御手下して開眼し給。(中略)往生極樂は朝夕の御のぞみなりければ、臨終正念みだれず、瑜珈振鈴のひびきは其夜をかぎり、一乘暗誦のこゑはその眺にをはりき。普天かきくらし、率土露しげし。草木愁たる色あり。いはむや霸陵の松においてをや。鳥雀哀むこゑあり。いはんや洞庭の鶴においてをや。おほ宮人は桜色に染したもとをしなべて、卯月をまつに咲かゝる藤の衣にたちかへき。慈悲の恵一天の下をはぐくみ、平等の仁四海の外にながれき。

風吹ぬ御世にも猶ぞ思ひ入にし月の春のおもかげ

と記してゐる。この中でも特に注目されるのは、右の「中略」の部分であつて、六代勝事記には、

叡心「に」そむきし青葉は、風の前に散はて、朝章をみだりし白波は、うたかたと消(え)にしかども、分段の秋の霧玉鉢ををかして、無常の春風花のすがたをさそひき。

とあるにも拘らず、知恩伝には、該当部分に

法勝寺均<sub>ニ</sub>白河院御願<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>九重塔<sub>ニ</sub>。三密護摩<sub>ノ</sub>觀行<sub>ノ</sub>二万二千余座。一乘法花転説<sub>ノ</sub>七万八千部也。書<sub>ニ</sub>写<sub>ニ</sub>一切經<sub>ノ</sub>三部。六齋被<sub>レ</sub>禁<sub>ニ</sub>殺生<sub>ノ</sub>等。事理善根不<sub>レ</sub>知<sub>ニ</sub>其數<sub>ノ</sub>。

とあるほか、「風フカヌ」の歌の直前に、六代勝事記の「慈悲の恵一天の下をはぐくみ、平等の仁四海の外にながれき。」の文に類似した「仁流<sub>ニ</sub>秋津洲<sub>ノ</sub>之外<sub>ニ</sub>。」の文を記し、引続いて六代勝事記に見えない「恵<sub>ニ</sub>茂筑波山<sub>ノ</sub>之影<sub>ノ</sub>。」以下の文を記してゐることである。けれども、

知恩伝に及ぼした六代勝事記の影響

これらの異同の中、六代勝事記の「叡心」以下の文が、知恩伝に於て「法勝寺」以下の文に取つて替つてゐるのは、やはり後白河法皇の御事績を讀へんとする作者の心の表はれと解されないものだらうか。六代勝事記のやうな文であれば、ただ法皇の崩御に際しての無常を読者に感ぜしめるのに効果があるに過ぎないやうに思はれるが、いかがであらう。知恩伝の「仁流<sub>ニ</sub>秋津洲<sub>ノ</sub>之外<sub>ニ</sub>。」以下の文については、たまたま「仁流<sub>ニ</sub>秋津洲<sub>ノ</sub>之外<sub>ニ</sub>。」の箇所だけが六代勝事記の「慈悲の恵」以下「ながれき。」までに似通つてゐても、これはむしろ、古今集真名序の終末辺に、

陛下御宇。于今九載。仁流<sub>ニ</sub>秋津洲<sub>ノ</sub>之外<sub>ニ</sub>。恵<sub>ニ</sub>茂筑波山<sub>ノ</sub>之陰<sub>ニ</sub>。淵<sub>ニ</sub>变为<sub>レ</sub>瀨<sub>ノ</sub>之聲<sub>ノ</sub>。寂々閉<sub>レ</sub>口<sub>ノ</sub>。砂長<sub>ニ</sub>為<sub>レ</sub>巖<sub>ノ</sub>之頰<sub>ノ</sub>。洋々滿<sub>レ</sub>耳<sub>ノ</sub>。思<sub>ニ</sub>繼<sub>ニ</sub>既絶<sub>ノ</sub>之風<sub>ノ</sub>。欲<sub>ニ</sub>興<sub>ニ</sub>久廢<sub>ノ</sub>之道<sub>ノ</sub>。

(註九)

とある箇所の箇所を、直接に引用したものと見るのが妥当ではあるまいか。なほ、六代勝事記の右の文も、後藤先生が前掲御著書や御講議で御指摘になつた通り、延慶本平家物語第六末の「法皇崩御之事」の文とほとんど大差がない。私の「六代勝事記ノート」には、本条に昭和二十二年五月二十二日の日附があり、前条と同様に、延慶本平家物語に關することが記されてゐるが、入学してまだ日の浅かつた私にとつては、このあたりで先生から承はる「延慶本」「久原文庫」「古梓堂文庫」「内閣文庫」「百鍊抄」「皇帝紀抄」「安元御賀記」「拾芥抄」「大日本史料」「史料綜覽」等々の名は、いづれも聞き初めの珍らしいものばかりで、国文学研究の奥深さにはひたすら驚異の目をみはつたものである。ちなみに、延慶本平家物語の「法皇崩御之事」の条は、前掲の「右大將頼朝果報目出事」の直前

建久三年三月十三日法皇遂に崩御々々年六十六、後年高連の君也、

御賀御逆高野詣御登山勝地名所の観覧をきはめ驗仏靈社の臨幸を尽し、四明には大乘戒を受、三井には密教を習ひ東大寺には聖武創草の跡をとめて金銅の靈佛御手を下に開眼し給、叡心に背し青葉は風の前にちりはて朝章を乱し白波はうたかたと消しかと、分段の秋の霧玉躰ををかして平常の春の風花の姿をさそひき、往生極楽は朝夕の御のそみなりければ臨終正念みたれ

す、瑜伽振鈴の響は其夜をかきり一乗暗誦の御声は其暁に終りき、普天かきくらし率土露しけし、草木愁たる色あり、況や霸陵の松にをいてをや、鳥雀哀へる音あり況や洞庭の鶴にをいてをや、大宮人は桜色にそめし袂ををしなへて卯花を松にさきかゝるふちの衣にたちかへて慈悲のめくみ一天の下をはくくみ、平等の仁四海の外に流れき、(一〇〇六頁)

とあつて、六代勝事記に記す「叡心」以下「さそひき。」までの文もそのまま見えるが、「風吹ぬ」の歌は省略されてゐる。

知恩伝下巻の「後京極撰政殿葬去事」の条は、

建永元年三月七日。撰政太政大臣良経公頓死。月輪禪定殿下御息也。文操過人理政撫民。諸道探淺深而測浮沈。万機補佐。政而無親疎。朝之賢智也。世之神才也。前大僧正慈円相共思沈給。職事弁官道暗。文峰歌苑。主失被仰。花尚昔花留有露。宅是旧宅院無人。

秋ノ夜ノ風ト月トノ友ハミナ春ノ山路ニマヨヒヌルカナ

禪定殿下此御歎打副。(下略)

となつてゐるが、これも六代勝事記に、

建永元年丙寅。

三月七日、撰政大臣良経頓死。後京極殿と申にや。文操人にすぎ、理政民をなで、(諸道に)浅深をさぐりて浮沈をはかり、万機に補佐して親疎なかりき。

花尚昔花留有露。宅斯旧宅院無人。

金谷の花のほひ、(中略)職事弁官も道にくらく、文峰歌苑に主をうしなへるとかきくらしして、

秋のよの風と月との友はみな春の山ぢに迷ひぬる哉とよみ給ひければ、(中略)ことはりすぎてぞ侍りし。

とある記事の一部分を資料としたものと考へられる。しかし、両者は全く同一ではなく、知恩伝の「月輪禪定殿下御息也。」をはじめ「禪定殿下此御歎打副。」以下の文などは、六代勝事記に見えないし、逆に、六代勝事記の「金谷の花のほひ、」以下「職事弁官も」の前までの文、および「とよみ給ひければ、」以下の文は、知恩伝で改作あるいは省略されてゐる。両者の異同の事情については、軽卒な判断はゆるされないので、今はとりあへずその実態を見るだけに留めたい。

知恩伝下巻の「隱岐院謀反事」の条は、かなり長文であるが、これもまた六代勝事記の文と符号する箇所がきはめて多い。比較対照の便宜上、長文の両者を敢へて引用しておくが、知恩伝の本条は、次の通りである。

(A) 承久三年五月十五日。太上天皇同天宝昔。召集兵一誅洛陽守護庭尉光季之後。為追討。右京権大夫義時被分遣打

手之間。関東武士等又依二品禊尼下知責ニ上テ于京都。其武  
如焚会之入ニ鴻門。其勇似仁貴之破ニ鷄林。(B)六月十五日百

万軍兵自ニ宇治勢多ニ入浴。畿内畿外遠近充滿。捜求道ニ戰場  
之者斬首無餘。隙ニ于拭白刃。一人馬死傷。塞区。不輒ニ行歩

(C)西面北面誇朝恩。好武勇之輩忽滅亡。近習寵臣立刃功之  
族。悉被囚。大納言忠信。按察使光親。中納言宗行。二位兵衛

督有雅。宰相中将範茂。宰相中将信能卿等。不心。旅空。後先  
立東道。行末。猶足柄。不閑敢。涙流。何嗚見方。来。悲。矣。

(D)光親卿。富士。未野。秋。初風。秋下葉。吹夕。露命。消敢。程。蓬髮下  
蓮花願。法花經説。被斬ケル。宗行中納言菊河宿タリケル夜。

立入。宿。柱書付ケル。  
昔南陽。具。菊水。汲。下流。而延。齡。今東海道。菊川。宿。西岸。而

失レ命云々  
浮島原ヲ過ケル時  
ケフスケル身ヲウキシマノ原ニテソツキノ命ヲキ、サタメ

ツル  
藍沢云所。遂被レ切畢。  
有雅卿。範茂。卿。皆於ニ東土路傍。失レ命畢。

(E)同七月六日。太上天皇。奉レ移。鳥羽殿。大宮中。中納言。宰相。中將  
左衛門尉。能茂。許御共。出ニ四辻殿。給。御心中。可ニ推量。叙覽外

七条殿。遙願。給。紫宸殿。軒葉。隱ヌレハ。離宮。塵深。洞庭。只兵  
充満。

(F)同八日。御出家。大軍。田鳥。不通。不隔。錦帳。三千。籠  
愛此世。御姿。不レ及。奉レ見。近ニ玉砌。近習。臣妾。不レ替。御有。様。不レ能

知恩。伝に及ぼした六代勝事記の影響

奉レ拜。召ニ信実。朝臣。一令。囚。御影。被レ進。七条。女院。女院。即有ニ  
御幸。一御日。互。泣。外御。詞無。懸。女房。手。任。足。即立。帰。畢。

(G)同十三日。奉レ移。隱岐。国。武士。立。副。御。與。勅。申。先。途。傾。月  
可。惜。御。名。殘。遮。奉。見。人。々。朝。恩。誇。朝。賞。漏。莫。不。落。涙。

自。鳥羽。西。定。武。士。有。様。學。給。人。所。好。必。不。空。無。レ。由。ケ  
レ。御。サ。サ。ミ。哉。悔。被。思。食。ケル。(H)可。憐。水。無。瀨。洞。庭。浮。レ

亡。国。恨。隋。庭。シ。モ。限。ラ。サ。リ。ケリ。出。雲。国。大。浜。云。所。付。セ。給。テ  
タ。ラ。チ。メ。ノ。キ。ハ。ヤ。ラ。テ。マ。ツ。露。ノ。身。ヲ。風。ヨリ。サ。キ。ニ。イ。カ。テ。ト

ハ。マ。シ  
シ。ル。ラ。メ。ヤ。ウ。キ。世。ヲ。ミ。ヲ。ノ。ウ。ラ。チ。鳥。ナ。ク。ノ。ソ。ル。ソ。テ。ノ  
ケ。シ。キ。ヤ

(I)雲波。煙。浪。凌。遙。隱。岐。渡。付。給。ヒ。ヌ。境。非。ニ。南。北。鳥。札。失。レ。便。  
政。陰。陽。變。不。レ。測。鳥。頭。白。成。無。期。泣。々。望。故。鄉。雲。海。沈。々。

眼。為。レ。穿。空。瞻。其。方。山。青。黛。翠。薄。思。不。痛。云。事。無。朝。愁  
夕。悲。撰。地。山。庄。觸。折。曆。一。覽。四。季。景。色。統。万。事。觀。念。令。感。種

々。雜。芸。何。玉。体。堪。中。奇。苑。蹴。鞠。之。御。遊。古。今。無。比。御。事。也。黃。帝  
古。跡。白。河。春。天。移。明。石。浦。朝。霧。水。無。瀨。秋。夕。詠。給。三。十。九。年。御。榮。

一。時。逆。德。衰。四。十。八。願。憑。始。三。尊。來。迎。期。御。  
カ。ネ。テ。ヨ。リ。イ。ハ。テ。コ。シ。マ。ノ。タ。ヨ。リ。ア。ラ。ハ。松。風。サ。ソ。ヘ。ム。ラ。サ

キ。ノ。雲  
(J)昔。清。涼。紫。宸。金。扉。采。女。並。腕。卷。玉。簾。今。民。烟。蓬。藁。葦。軒。海。人  
垂。釣。為。ニ。語。友。槐。門。棘。路。之。類。拭。紅。淚。於。征。路。之。月。月。卿。雲。客。之

輩。斬。生。頭。於。他。郷。之。雲。ト。ソ。書。置。給。ケル。  
(K)凡。三。帝。一。時。殘。遠。流。之。恥。諸。臣。一。旦。泣。死。刑。之。罪。因。果。所。レ。酬

豈不<sup>二</sup>思食知<sup>一</sup>乎。

(註二)

これに対する六代勝事記の文を次に掲げよう。

(イ)五月十五日に、太上天皇、天宝のむかしにひとしく、兵をめでして洛湯の守護延尉光季を討せられ、追討使をわかちつかはすに及びて、二品禪尼有勢の武士を庭中に召あつてかたらひていはく、(中略)樊噲が鴻門にいり、仁貴が鶏林をやぶりしよりいちはやく、(中略)(ロ)同十五日に、百万のいくさ入洛して畿内畿外にみちみり。戰場をのがれたるものをあなぐりもとめて、首をきる事白刃をのごふにひまあらず。人馬の死傷ちまたをふさぎて行歩たやすからず。(中略)(ハ)西面北面の朝恩にほこりて武勇をこのむ、たちまちにほろび、近習寵臣の辺功をたつる、ことごとくとらへられぬ。大納言忠信、按察使光親、中納言宗行、二位兵衛督有雅、宰相中将範茂、宰相中将信能卿等、心ならぬ旅のそら、をくれさきだつあづまぢのゆくすゑに、なをあしがらのせきあへぬ涙をかけて、いかになるみのかたにきぬらんと、かなしき(中略)(ニ)光親の卿は、不尺のすその秋のはつかぜ、萩のした葉をふく露のいのちむすびもあへぬほどに、よもぎのかみをおろし、はちすの花をねがひ、法花経をよみてぞはかなくなりける。宗行卿は、うきしまが原をすぐる日、けふをかぎりときまて、

昔南陽県菊水汲<sup>二</sup>下流<sup>一</sup>而延<sup>二</sup>輪<sup>一</sup>。

今東海道菊河宿<sup>二</sup>西岸<sup>一</sup>而失<sup>二</sup>命<sup>一</sup>。

けふ過る身をうき嶋の原にてぞ

つゝの道をば開定つる

手なんどあらはんとて、たち入りたる道のべの家の柱にかきつけて、ゆき／＼てあひぎはといふ所の木しげきゆふ露を、目ぐらしの音にそへてきくにける。有雅卿も、このほどにてうせにけり。範茂卿は、もとより花の都にちりのこるべき人ならず。唯身をうぢがはに名をながすべかりけるを、はかなくのがれて、はやかのそのみくづとなりにしこそあやなく侍つれ。信能卿は、みのの国遠山といふところにぞをはりにける。(ロ)同七月六日、太上天皇を鳥羽殿に遷し奉るに、(中略)大宮中納言、左宰相中将、左衛門尉能茂ばかりにて、よつつじどのをいひさせ給。御心中をしはかるべし。叡覽よそなる七条殿はるかにかへり見させ給。紫宸殿の軒端もかくれぬれば、離宮ちりふかくして洞庭には(たゞ)兵のみあり。(中略)(ハ)同八日御出家。大軍かこみて鳥だにもたゝねば、錦の帳をへだてざりし三千のたぐひも、この世の御姿を見たまつらず。玉のみぎりに侍りし臣妾も、にうわの御声をきくなし。信実めして、御姿をうつさせて御覽するにも、(中略)七条院今はかぎりの御名ごりにたへず、御幸なりたるに、(中略)もるともになくより外の御詞なし。御目たがひにくれにければ、女房のかたに手をかけて、あしにまかせて、やがてたちかへらせ給にけり。(中略)(イ)同十三日に、隱岐国へうつし奉るに、ものゝ御こしに立そひて、先途をすゝめまうせり。かたぶく月のおしかるべき御名残なれば、さいぎりてみたまつりし人々、朝恩にほこりしも朝恩にもれしも、涙をおとさずといふ事なし。(中略)鳥羽より西は、さだまれる式にて、もののふのありきをまなび給ひしぞかし。



人のこのむ所かならずむなしからぬならひなりければ、(中略)よしなかりける御すさびかなとぞ、くやしくおぼえ侍し。(中略)(イ)あはれぶべし。みなせの洞庭に柳かして、亡国のうらみ隋堤にしもかぎりざりける(中略)いづもの国におほはまといふ所につかせ給ひぬれば、(中略)

たちねの消やらでまつ露の身を

風より先にいかでとはまし

(中略)

しるらめやうき世をみほの浦ちどり

なくくしほる袖のけしきを

(中略)(イ)雲の浪けぶりのなみをしのぎて、はるかのおきにわたりつかせ給ひぬ。さかひ南地にあらねば鷹のたまづさもたよりをうしなひ、政陰陽の変をはからざりしかば、鳥のかしらの白くならむも期しがたし。なくなく故郷をのぞめば、雲海沈々として眼うけむなく、そなたの山をまほれば、青黛みどりうすくして思ひをいたましむ。朝にうれへ夕にかなしむ。地をひらきし山庄、折にふれたる歴覧、四時の景気、すべて万事観念を感じしめて、さまざまの雑芸、いづれも玉体にあたりにしなかに、歌苑の御あそびはすぐれたりしわざなり。(中略)蹴鞠は古今たぐひ少なかりし事也。黄帝の古のあと、白河の春の天にさかりなりき。卅九年のさかへ、一時の逆徳にとろへ、冊八願のたのみ、三尊の来迎を期すべし。

かねてよりいほで小じまの便あらば

松風さそへむらさきの雲

知恩伝に及ぼした六代勝事記の影響

(中略)(イ)何によりてか三帝一時に遠流のはぢある。(下略)

さて、知恩伝の(A)(B)(C)(D)(E)(F)(G)(H)(I)はそれぞれ、六代勝事記の(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)(ヌ)の文と類似してゐるが、知恩伝の方は六代勝事記の文の一部を省略するだけではなく、辭句をやや改めたりして、全体を簡略化してゐるところも見られる。例へば、六代勝事記の(ニ)に、「法花経をよみてぞはかなくなりける。」とあるのが、知恩伝の(D)では「法花経説、被斬ケル。」となつてゐたり、また(ニ)に「ゆきく〜てあひさはといふ所(中略)遠山といふところにてぞをはりける。」とあるのが、(D)ではきはめて簡略に「藍沢云所遂(中略)失命畢。」と記されてゐるに過ぎない。後者の例は、おそらく、(ニ)の「有雅卿」「節茂卿」「信能卿」が同様の運命となつたため、(D)でこれらを一括表現したものであらう。このほか、(ニ)の「宗行卿」に関する記事に見える「うきしまが原をすぐる日」は、(D)では「浮島原ヲ過ケル時」として「昔南陽県」の漢詩の次に位置し、(ニ)の「手などあらはんとて、(中略)家の柱にかきつけて、」は、(D)では「菊河宿タリケル夜。(中略)書付ケル。」として右の漢詩の直前に見えるなど、詞章の位置の転換してゐる所もある。さう言へば、このやうな手法は、鎌倉時代の文学作品に於ける改作の場合にもしばしば見られるもので、今後、知恩伝は、物語の改作現象の究明に対する一参考資料としても価値を認めねばならないであらう。なほ、知恩伝の(J)は六代勝事記の(イ)〜(ヌ)のいづれにも該当しないが、(註二二)兄の考察によると、(J)は、後鳥羽上皇の御製無常講式第三段に見え

昔清涼紫雲金扉、菜女並腕卷玉簾、今民煙蓬葦葦軒海人垂

鈎僅成<sup>a</sup>語、月卿雲客身切<sup>b</sup>生頭於他郷之雲、槐門棘路人蕃紅  
涙於征路之月、

の a b 兩句を転換して引用したものである。

#### 四

以上、知恩伝と六代勝事記につき、主としてその形式的な比較を試みたが、とにかく知恩伝が六代勝事記を資料としてその上に成立したものであることは、もはや疑問の余地はあるまい。しかしながら、前述のごとく、知恩伝上巻の「後白河法皇崩御事」の条に、古今集真名序の一部が用ひられたり、知恩伝下巻の「隠岐院謀反事」の条に無常講式の文とほとんど同じものが記されるほか、法花験記・拾遺伝・史記・孝経・漢書等の書名を明記した上で、それぞれ必要な文を引用する箇所が散見するなど、知恩伝が六代勝事記以外の書を原拠として書かれたこともまた否定できないのである。これら六代勝事記以外の出典については本稿と直接関係がないので、詳細は省くが、要するに、知恩伝は法然上人の伝記を纏めたものであるから、その目的のために関係事項や関係史実を、他書によつて記したものはあるまいか。そして、六代勝事記は、そのために使用された材料の一つであるといふことができるであらう。

中世の文学についてはほとんど門外漢でありながら、私は臆面もなく筆を進めてしまつた。後藤先生が今なほ御健在でいらつしやつたら、いつものやうに「そんなにあれもこれもと手を着けてはいけませんね」と、専攻以外のことになやしく発言した私を厳しくたしなめられるかも知れないが、特におゆるしを願ふことにして、ひた

すら先生の御冥福をお祈りしたいと思ふ。

(註 一) 第二十七号(昭和三十四年十月刊)「山脇博士古稀記念特集 その一」

(註 二) 先生のこの御論文は、最近、「六代勝事記の諸問題」として「学大国文」(第六号「後藤丹治教授停年退官記念号

国文学叢考」昭和三十八年二月、大阪学芸大学国語国文学研究室刊)に収載された。

(註 三) 第拾巻(昭和六年五月刊)「望西楼特輯号」

(註 四) 「摩訶衍」第拾巻所載。

(註 五) 「了惠上人伝に就て」(「摩訶衍」第拾巻所載)。ただし、この説に対しては、兄もやや疑問を抱いてゐるやうである(宝田正道「知恩伝攷」「浄土学」第十五輯―昭和十四年十二月―所載)。

(註 六) 前掲の「知恩伝攷」による。

(註 七) 「摩訶衍」所載の知恩伝の「解説」中には、校訂の要領につき、「明了なる誤字は之を訂正して置いた。判読出来ざる異様の文字は□印の欠字を置き、文字は明了なるも意味の通ぜざるものには(マ、)の印を付した。返り点はたゞ一の印のみありて二、三等の印なき古態を存するのであるが、今は全部之を改めて現時行はれてゐる返り点を付し、以て判読に便ならしめた。傍註に字音、字訓を現はす仮名が多く付せられてあつたが、参照に値するものゝみを存して、他は一切之を省いた。送り仮名も明了なる誤は之を訂正し、余りに繁雑なる所は意味を存せざる限り之を刪つた。」とあるので、以下、返り点や送仮

名なども一応原本通りにしておく。

語の研究」参照。

(註八) 以下、延慶本平家物語は本書を使用する。

(註一三) 宝田正道「無常講式と知恩伝」(中外日報)昭和十四

(註九) 日本古典文学大系本、三四一頁。圈点筆者。

年五月)・「後鳥羽上皇の御信仰」(浄土学)第十四輯(昭和

(註一〇) 便宜上、(A)(B)(C)……の符号を施す。

十四年六月)所載)

(註一一) 便宜上、(イ)(ロ)(ハ)……の符号を施す。

—昭和三八・六・一、御命日の夜—

(註一二) 三谷栄一博士著「物語文学史論」・小著「平安末期物